

会 議 録

会議の名称	令和5年度第1回茨木市総合教育会議
開催日時	令和5年10月19日(木) (午前)・午後) 10時30分 開会 (午前)・午後) 11時50分 閉会
開催場所	市役所南館8階 中会議室
議長	福岡 洋一(茨木市長)
出席者	福岡 洋一(茨木市長) 岡田 祐一(教育長)、前川 佳之(教育長職務代理者)、 堀村 佳奈子(教育委員)、堀井 孝容(教育委員) 水上 明美(教育委員)【6名 敬称略】
欠席者	なし
事務局職員	上田企画財政部長、山寄こども育成部長、小田教育総務部長、青木学校教育部長、岩崎企画財政部副理事、東井こども育成部副理事、辻田教育総務部次長、梶西学校教育部次長、新川教育センター所長、岡本政策企画課係長、古川教育政策課長代理【11名】
開催形態	公開
議題(案件)	(1) 開 会 (2) 市長あいさつ (3) 報告案件 茨木市教育大綱の体系に沿った第5次茨木市総合計画における施策等評価結果について (4) 協議案件 1 保幼小中連携について 2 不登校・引きこもり支援について (5) その他 (6) 閉 会
配布資料	(1) 茨木市教育大綱の体系に沿った第5次茨木市総合計画における施策等評価結果 (2) 保幼小中連携について (3) 不登校・引きこもり支援について
傍聴者	0人

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
事務局	<p>1 開会 ただ今より「令和5年度 第1回茨木市総合教育会議」を開催する。 会議は原則公開としており、傍聴の事前予約はないが、もし途中で傍聴を希望する方が来た場合は、入室を許可する。 会議の進行にあたっては、総合教育会議運営要綱第3に基づき、福岡市長に務めていただく。</p>
福岡市長	<p>2 市長あいさつ 新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行し、こどもたちの学校生活についても元に戻りつつある印象を受けている。 しかし、コロナ禍の影響からかマスクを外したがるこどもがいたり聞く一方で、夏頃からインフルエンザが流行している。また、3年間で小学生・中学校のスポーツテストの結果が悪化している状況である。これは、全国的、またこどもだけでなくあらゆる世代における傾向で、コロナ禍で体力が落ちているのかと思うところであり、市としてもインフルエンザのワクチン接種補助等の対応を行っている。 このように、教育を取り巻く環境についてもいろいろな変化が生まれていることを踏まえつつ、教育委員の皆様がどのような意見をお持ちか伺い、来年度以降の予算等に活かしていきたい。</p>
福岡市長	<p>3 茨木市教育大綱の体系に沿った第5次茨木市総合計画における施策等評価結果について（報告案件） 「茨木市教育大綱の体系に沿った第5次茨木市総合計画における施策等評価結果について」、事務局から説明を求める。</p>
事務局	<p>【茨木市教育大綱の体系に沿った第5次茨木市総合計画における施策等評価結果について説明】</p>
福岡市長	<p>施策評価結果は、コロナ禍の影響も一定踏まえたものとなっている。この施策評価の内容、また施策評価から離れても良いのでコロナ禍の振り返りや評価について、ご質問、ご意見等をいただきたい。</p>
前川教育長 職務代理者	<p>教育委員会の事務管理執行については、教育委員会独自でも評価を行い、学識経験者の意見も聴取している。その中では高い評価をいただいている。 コロナ禍については、市長の話にもあったとおり体力面など様々な形で影響が出ている。しかし、茨木市が独自で進めているいろいろな施策は、</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
堀村委員	<p>間違いなく進展していると感じており、教育委員会職員及び学校現場の皆さんは本当に頑張っていると評価している。</p> <p>施策評価で評価が下がってしまった「学校施設の計画的な整備・充実」については、学識経験者からの指摘にもあるように、導入の進んだICT機器を、今後、どう上手く使いこなすかということが課題になると思う。</p> <p>先日、研修でICT機器を使った授業の見学をしたが、ICT機器の使い方次第で、業務改善に繋がり、生徒一人一人を見る時間が増え、学校全体が改善していくように感じた。このようないい事例を上手く取り入れていけたらと考える。</p> <p>コロナ禍の影響については、マスクが外せるようになったり黙食が解除されたりするなど、こどもが楽しく過ごしやすくなりありがたいところではあるものの、今まで制限されてきたものがいきなり解除されて戸惑うところもあるように思う。保護者についても同様に、他の保護者との関りなどの制限は解除されているが、まだ影響が残っていると感じる。</p> <p>後の議題にもあるが、不登校などについてもコロナが一因として影響していると思うので、改善に向け見守っていかなければいけないと考えている。</p>
堀井委員	<p>施策評価のように施策の進捗状況が一目で分かるように整理することは大切だと思う。</p> <p>医療従事者の立場からすると、感染症は5類に移行したからといってないがしろにはしてはいけないものである。確かにコロナによる死亡率は下がったものの、引き続き蔓延はしており併せてインフルエンザも流行している。学校のカリキュラムなどの進捗も大切だが、感染が広がらないよう対策を取りつつカリキュラムを進めていくため、両立していく工夫が必要だと考えている。</p>
水上委員	<p>施策評価については、コロナ禍で非常に大変な中であっても、幼稚園や学校現場において努力を積み重ねて、概ね良い結果を得ていることは評価すべきだと思う。</p> <p>コロナ禍については、市長挨拶や堀井委員のお話にもあったとおりインフルエンザが流行しているなど免疫力の低下は明らかなので、保護者や教育現場だけでなく、社会全体が意識的に、感染対策やどうすれば皆が幸せに生きていけるかについて、それぞれの立場で考えていかないといけないと思う。</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
岡田教育長	<p>コロナ禍において学校現場としては努力をしてきたと思う。ただ、施策評価の中で指摘もあったICT機器の活用など、従来から行ってきていない新しい取組については改良の余地があり、今後の課題として捉えている。</p> <p>また、従来から行ってきた取組についても、コロナ禍を経て内容が精選されている。例えば、運動会を午前中で終えたり地域の運動会と合同で実施したりするなどの取組があり、その中で生じた余裕の時間をこどもと向き合う機会などに活用して行ってほしいと考えている。</p> <p>また人的配置について、35人学級制が進むなど、中学校も含めて教員が足りない状況で、教員が増えれば、働き改革と両立しながら様々な施策を実施できると思うので、教員の増員を国へ要望していきたいと考えている。</p>
福岡市長	<p>人によって考え方は様々で1つの正解を出すことは難しい面があり、そのことは特にコロナ禍において如実に表れたと思っている。例えばリスクの捉え方やリスクへの対応等についていろいろな考え方があり、本来人の考えはそれぞれ違い正解はない中でも、ともに立場を尊重し議論しながら答えに向かって進んでいかなければならなかった。</p> <p>コロナ禍から日常が戻ってくる中でも、お互いに尊重し進めていかなければならず、施策の評価についてはどうなれば100点満点なのかというところは難しいが、諦めずに一歩ずつ、皆様と一緒に進めていきたい。報告案件については以上とさせていただきます。</p>
福岡市長	<p>4 (1) 保幼小中連携について (協議案件)</p> <p>次に、協議案件の「保幼小中連携について」、事務局から説明を求める。</p>
事務局	<p>【保幼小中連携について】</p>
福岡市長	<p>何か、ご質問、ご意見等は。</p>
前川教育長 職務代理者	<p>茨木市において実施している「茨木っ子キャリアパスポート」は、4歳から15歳のこどもを対象に11年間の記録を積み重ね、自身の成長の軌跡の確認や非認知能力の育成につながる素晴らしい取組だと思う。そのような中で2点言及したい。</p> <p>1点目は、保幼小中連携について、公立だけでなく私立においても、連携が深められている点はとても評価でき、継続して取組を進めていただきたい。</p> <p>2点目は、非認知能力育成の効果測定が必要だと思う。例えば認知能力が葉で思考系能力が幹とすれば、非認知能力は根であり、効果測定は難し</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
堀村委員	<p>く、また他自治体との比較も困難である。そのような中でも、本市内での経年比較等により取組の効果を示すことで、非認知能力の育成の成果をわかりやすく提示すれば、保護者やこどもたちの非認知能力についての理解が進んでいくと思うので、今後の新たな取組として検討いただきたい。</p> <p>小学校への入学等の環境の変化に適応することは親子ともに難しいことも多い中で、茨木市では早期から保幼小中連携を充実させ、環境の変化への支援を行っており、非常に良い取組であると思っている。</p> <p>連携の内容については、先生間の交流は充実しているが、こども間の交流も重要だと考える。保育園・幼稚園の時から小学校に行く機会を設けることで、小学校や小学生の生活を実感できる機会としたり、小学生も園児と触れ合う中で自身の成長を実感する機会としたりすることができればと思う。他市では、小学生と園児と一緒に遠足や授業、学校行事等に参加している事例があるので、本市でも参考にして取り組んでいけたらと思う。</p>
堀井委員	<p>マクロな視点から1点、ミクロな視点から2点言及したい。</p> <p>マクロな視点としては、保幼小中連携の推進のためには、その定義を明確化した方が良くと思う。例えば、日本では小学校、中学校、高校、大学がそれぞれ6年、3年、3年、4年となっているが、それぞれの課程で求めるものが何であるかをはっきりさせることが大切であると考えます。</p> <p>ミクロな視点の1点目としては、健康に関するデータの引継ぎであり、例えば小学校時のデータの中学校への引継は健診での発見率の向上に有効である。2点目は15歳で義務教育が終了することからそれ以降の病気の感染率や発生率を下げる取組が難しくなっているため、連携ができるならば保健衛生、公衆衛生上、役に立つと思われる。</p>
水上委員	<p>保幼小中連携について、保幼小だけでも、また私立も共に行うことは非常に難しい中、茨木市では中学校も加えた15歳までの連続した成長を、みんなで支える視点で早くから連携に取り組んでおりとても誇らしい。特に、茨木っ子保幼小中連携事業のアドバイザーは著名な先生方で構成されており、現場の先生もアドバイザーの先生方からしっかりと学んでいただきたいと思う。また、先生たち等の大人の交流は異なる学校間では難しいところで、各学校のコーディネーターが努力して繋いでいることを引き続き大事にして取り組んでほしいし、こういった取組が不登校のこどもたちへのサポートの一助になると思う。</p> <p>また、困難につまづきやすいこどもが増えている傾向がある中、保幼小中の間に様々な段差を乗り越える力を身につけていくためにも取組を継続</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
福岡市長	<p>していただきたい。さらに効果測定についても、保護者の理解促進に向け、先生や子どもたちの成長の変化など様々な側面からしっかり行っていく必要があると思う。</p> <p>保幼小中連携においては、先生たちの目線を合わせる事が大切であるが、そのための時間を他の業務も多い中で確保し、過去から積み上げてきたことは努力の賜物であると思う。</p> <p>市としてもインクルーシブの観点も含めて、私立幼稚園保育園に医療的ケア児など支援が必要な子どもたちの受入を依頼している。依頼するだけでなく研修なども含めた体制の充実により、既存の取組から一歩でも二歩でも拡充し、同じ目線で積み上げていきたいと思っている。</p> <p>また、小学校高学年や中学生からではなく幼稚園・保育園の頃から、子どもたちとの関係性はもちろん、保護者とのつながりもしっかり構築していきたいと願っている。</p>
岡田教育長	<p>保幼小中連携については、まだまだ発展途上だと捉えている。推進するにあたっては、相互のカリキュラムや現場状況を共有し理解した上で子どもたちに接することが大切で、例えば、保育と教育、教育の中でも小学校と中学校など、過去には相互の理解不足があったが少しずつ解消してきて目線の統一が進んでいる。そのためには、共通のテーマを持つことが必要で、現在、非認知能力が共通テーマとなり取組を進めている段階である。</p> <p>保護者との関係性の構築については、機会を捉えて非認知能力や遊びの重要性について保護者の方々と話をしている。遊びについては、義務教育の中で遊びを通じて子どもたちが経験や体験を積んでいくことが非常に大切だと捉えている。保護者の方々は、子どもたちがけんかや怪我をしないように先回りして配慮されることも多いが、経験や体験によって子どもたちのコミュニケーション力や危険への理解が深く養われることも保護者の方々にお話ししている。</p> <p>また、保護者間の横のつながりについても、悩み事などを本気で相談できるほど深い関係性が構築できていることは多くないと思うので、指導者の方や教員、保育士等が紡いでいく必要性を感じている。仕事量は増えるが子どもを視点の中心に据えて取り組んでいく。</p>
福岡市長	<p>健康に関するデータの引継ぎについて、社会全体としてこどもの頃のデータから人生を通して一元管理した方が良いとの問題提起もあるが、取組としては進んでいないように感じている。データの重要性については漠然と理解が進んでいるが、具体的な意義の理解が進まない中で、個人単位の</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
	<p>データ管理の負担とリスクと比較して、慎重になっているところがあると思うので、データ管理の意義の明確化などにより取組が加速する可能性はあると思う。</p>
福岡市長	<p>4 (2) 不登校・引きこもり支援について (協議案件) 次に、協議案件の「不登校・引きこもり支援について」、事務局から説明を求める。</p>
事務局	<p>【不登校・引きこもり支援について】</p>
福岡市長	<p>何か、ご質問、ご意見等は。</p>
前川教育長 職務代理者	<p>不登校・引きこもり支援については、居場所づくりと社会的自立に向けた様々な取組が行われており、素晴らしいと思う。 不登校状態が続くとそのまま引きこもりになりやすく、資料にも記載のとおり早期発見・早期対応が大事になるので、まずは学校現場でサインを察知し、家庭訪問等を通じて保護者との協力体制を築いたうえで、スクールソーシャルワーカーなどの専門家の力も借りながら積極的な対応をお願いしたい。また、児童生徒が学校に行きたいと思っても、貧困の連鎖、ネグレクトなど保護者側の問題がある場合は、教育委員会や学校現場だけでは対応が難しいこともあるので、対応にあたり福祉部局等の市長部局との連携をお願いしたい。</p>
堀村委員	<p>不登校には様々な原因があり、原因によって対応も変わる。原因を分析し、個別のケースに応じたきめ細やかな対応に向け、前川教育長職務代理者からもあったとおり、教育委員会だけではなく市全体で連携し、こどもだけでなく家庭自体も支えていくことが大切になると思う。 また、早期発見・早期対応のためには、教職員の時間的、心理的余裕が必要になると思うので、業務改善については引き続きお願いするとともに、ICTを活用してこどもの心の状態を把握している他市事例も参考にしながら、感覚だけでなくデータなどを活用することも1つのアイデアになると思う。</p>
堀井委員	<p>医療的サイドから簡単に説明するが、不登校は、多職種連携で対応することが必要である。 不登校には4つタイプがあり、まず、強い身体症状や精神症状などがある適応障害型の内因主体型は医療面で対応が必要になり、残る3つは学校</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
福岡市長	<p>現場での対応が中心となる。</p> <p>具体的には、学校でのいじめなどで登校できない児童などの適応障害型の外因主体型、社会的逸脱行動により不登校になる児童などの未熟・回避型の外向型、面倒くさいから不登校になる児童などの未熟・回避型の内向型の3つについての対応を学校にお願いしたい。</p> <p>不登校は先が見えないように思われがちだが、1993年度の中学3年生で30日以上欠席した経過がある2万6000人を追跡調査したところ、20歳時点で約70%が社会参加できているとの結果が出ており、決して治らないものではない。</p> <p>不登校は、登校しない状態を表す用語で疾患概念ではなく、単一の原因を上げることは難しいが、素因と環境要因の2つが挙げられる。</p> <p>素因とは体質や性格傾向など、環境要因とは友達関係や家族問題などで、この相互作用で学校生活に適応できなくなった状態が不登校である。</p> <p>日本小児心身医学会が、「小児科医のための不登校診療ガイドライン」を出しており、小児医師の役割として、身体症状の関わりを通じた医師患者関係の構築、合併疾患等検索、状態に応じた社会参加の奨励の3点が挙げられている。</p> <p>まず医療的に対応が必要なものは器質的疾患で、例えば胃潰瘍などの炎症性腸疾患を除外した後に、「これは消化管の問題だよ」と説明して、心的サポートとともに軽度の薬物療法を組み合わせ対応している。</p> <p>こどもへの説明については、まず不登校状態にあることに気付くことが大切である。フルで学校に行かなくてもいいから、例えば保健室等にちょっと行ってみたらなどを提案することから始めることになり、とにかく命令ではなく、一緒にするとか依頼するというやりとりが大切でそういったことを家族に説明することが大切になる。</p> <p>不登校を3つのステージで捉え、第1段階は身体症状を訴えて欠席が増加する時期、第2段階は学校を休むことで身体症状が消失する時期、そこは少し家庭でフォローしていただきつつ、第3段階が社会適応に向けた回復時期となる。この3段階で不登校を収束していくという提案も出されている。</p> <p>そのため、学校側や行政側に、医療的サイドからお願いしたいことは、まずは学校との連携で、学校の環境調整がなければ、医療者だけでは対応しきれないため、教育センター、児童思春期外来、小児診療外来などの多職種連携での対応である。1人で抱え込まないことが大切であり、多職種が連携することで、ある程度は解決するものと期待している。</p> <p>不登校対策は個々に事情が異なるので、最終的には個人に着目して対応</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
事務局	<p>が必要だが、対応の初動において堀井委員から言及があったような類型化は教育委員会では活用しているのか。</p> <p style="padding-left: 2em;">一定の類型化を行った上で対応している。</p>
水上委員	<p>不登校については本当に様々な理由があり、学校現場でも一生懸命支援している。教育に携わるものとして、人と繋がることの大切さ、楽しさを学校で知って、社会に出て欲しいと思っている。</p> <p>そのため、不登校支援についてもいろいろな手立てを取りながら対応しているところであるが、学校だけでは対応しきれない部分もあり、教育センターなどでもいろいろな受け皿を作り、工夫していただいている。学校に登校するだけが全てではないので、こどもたちが少しでも外に出るきっかけをつくり、人と繋がることや勉強が面白いと思えるように様々な受け皿を引き続き作っていってもらえればと思う。</p> <p>また、こどもだけでなく、保護者も一緒に悩んでおり、不登校の家庭内連鎖などもあるので、保護者支援についても重要になってくる。保護者が一体どこに相談したらいいのか、どう繋がったらいいのかということを経験発信していくことが大事になる。</p> <p>さらに、教育現場には様々な課題があり、先生たちの負担も大きくなっているため、堀井委員も言及されていたが、業務改善も引き続き進めたい。</p>
福岡市長	<p>不登校・引きこもり支援は個人的にも非常に重要なテーマとして捉えている。基本的には、「学校に行くのが絶対的な正解で、学校に行かなければならない」ということではなくなっている。堀井委員も言及されていたようにこどもの意見を尊重しなければならないと考えており、この問題の本質はこどもの意思決定であり、こどもの選択に委ねられているということに尽きると思っている。</p> <p>こどもの意見を尊重する以上、不登校は0にはならない。そうであるならば、学校ではないどういう仕組みが必要なのか。何か一歩踏み出したけれど踏み出せないこどもがいるときに、その一歩になりえる場所として、できる限り多様な居場所を設けることが、行政として、市長部局としての役割だと認識している。</p> <p>非認知能力の延長として、こどもの時に様々な体験や経験をしていることが将来生き抜いていくために大切であり、市としてこどもたちが様々な体験や経験ができるような取組を1歩でも2歩でも、との想いで進めている。少なくとも、学校という居場所のある子と違って、他の居場所が欲しい</p>

議 事 の 経 過

発言者	議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
岡田教育長	<p>いかかもしれない不登校ひきこもりの子に対して、できる限り居場所の情報が届くように教育委員会と連携して進めていきたい。</p> <p>不登校・ひきこもりが0になることはなく対応策の正解もないと思うので、様々なしかけを設け、その情報をこどもたちに届けることで、少しでも心に刺さることがあればと思っている。</p> <p>不登校の状態であっても環境が少し変わると学校に来られるようになったり、一部のカリキュラムには参加出来たりすることもあるし、逆に今まで来ていたこどもが不登校になってしまうこともある。様々な原因や要因があるので、しっかりアセスメントをして、対応を考えていくことが本当に大切だと思う。</p> <p>そして、関わりを必ず持つておくことが大切で、茨木市では「1人も見捨てへん教育」というスローガンを掲げており、繋がっていることで居場所などの情報提供もできるので、特に保護者との繋がりによる家庭支援も必要になっている。他市町村では、オンライン授業の活用、フリースクール等の連携、カリキュラムの自由選択など様々な取組が行われているので、そのような事例も参考にしていければと思う。</p> <p>学校に来ることが絶対でもない中で、不登校のこどもがいる家庭に情報をしっかり伝え、社会的自立に向けた支援を行っていきたい。</p>
福岡市長	<p>不登校・引きこもりは0にならない中で、言葉自体にマイナスのイメージがついていることもあり、もっと自然な表現が存在したらとも思ったりもする。市長部局としても教育委員会と手を取り合いしっかりとサポートさせていただくので、引き続き教育委員会の取組の充実をお願いしたい。</p>
福岡市長	<p>最後に、11月26日に開館するおにクルについて案内させていただきたい。おにクルにはいろいろな施設が入ることになるが、施設を作って終わりではなく、何かに新しいものに触れたという体験を提供する場にしたいということを最も皆様にお伝えしたい。不登校・引きこもり支援の議題で出た話に通じるところだが、ある目的で来た人たちがたまたま来たついでにいろいろなものを目にしてしまっ、五感で何かプラスアルファを感じ、そこで展開されているものに触れ、予定にはなかったような活動もして帰ったというような形で新しいものに触れていただきたい。そのために様々な工夫をされており、例えば、吹き抜け空間で他のフロアで行われているいろいろな活動の音が聞こえるようにしたり、エスカレーターもワンフロアごとに少し歩かなければ次の階への行けないようにし、少しでもそのフロ</p>

議 事 の 経 過

発言者

議 題 (案 件) ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項

アで展開されているものを目にしてもらえるようにしている。

茨木っ子プランでも生きる力が出てくるが、人生を生きていくときに、自分自身で閉じこもったままずっと選択していると視野がとても狭くなる。今はオンラインなどでも無限の世界が広がっており、自分の視野だけで選択できる範囲はすごく狭いが、偶然の出会いがあることによってどんどん自分の世界が広がり選択肢も広がっていく。それによって人生が豊かになっていくと私は信じているので、おにクルで偶然の出会いをどんどん呼び起こすことによって、おにクルに来た人の人生が豊かになっていくことを願っている。

先ほどの様々な体験や経験をしてもらうという意味で、おにクルはうってつけの場で、そのための施設でもあると思っている。

また、教育委員会の管轄になるが、おにクルの図書館については、吹き抜け空間であるため静かではない図書館になることをご承知いただきたい。静かな場所で本を読むことを希望される方は中央図書館、少しガヤガヤしていても構わないという方へはおにクルを利用していただくなど住み分けを行っていただければと思う。

5 閉会

これをもって、第1回総合教育会議を終了する。